道徳性　～道徳教育の重要性と適齢期～

●前回のコラムではユヴァル・ノア・ハラリ氏の「サピエンス全史」を引用し、認知革命によってわれわれホモ・サピエンス（地球上唯一の人類）は「大勢の他人が信じられるフィクションを創造（又は推進）することを通じて、共に同じ目標に向かって一致協力する力」を得たことで、繁栄をわが手中に収めて来たという、人類史について紹介しました。

●そして、こういった力を正しく発現させるために必要なものとして、共感力と道徳性（倫理観）の2つがあるのではないかという見解を提示しました。なぜなら、一致協力を促すにあたり共感力は不可欠な要素であること、また協力の拠り所である目標自体が誤ったものであっては人類の未来にとって損失であることを、稲盛和夫氏の方程式（人生・仕事の結果＝考え方×能力×努力）を引用しながらお伝えしました。

●そして、この共感力と道徳性は乳幼児段階から育むべきものと私は考えていますが、前回のコラムでは特に道徳教育（以下「徳育」）に注力すべき根拠が不十分でした。そこで今回は、**「徳育に最も適切な時期とはいつなのかとその根拠」**について考えてみたいと思います。

＜①保育所保育指針における道徳性＞

●まず、保育士のバイブル「保育所保育指針」における道徳性の扱いについて見ていきましょう。指針では、第1章4（2）幼児期の終わりまでに育って欲しい姿（10の姿）の中で、道徳性に関する次のような記載があります。

【道徳性・規範意識の芽生え】
友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

●こういった「相手を思いやる姿」が具体的に見られるようになるのが、幼児期の終わりである **5 歳児後半頃**であり、集団での体験を通じて道徳性が陶冶されるとされています。

道徳性・規範意識の芽生え～5 歳児後半に見られる姿～



（引用：学研　保育 CAN 「やさしい3法令」 無藤　隆氏（白梅学園大学教授）

＜②日本のことわざ“三つ子の魂百まで”＞

●一方で私たち日本人は誰しも「三つ子の魂百まで」ということわざを耳にしたことがあると思います。「幼いころに形成された人間性は年齢を重ねても変わらない」という意味の諺ですが、これを文字通りに受け取れば、道徳性も 3 歳（数え年で考えると 1～2 歳前後）までに育むことが効果的だと言えそうです。



＜③儒教における道徳心～「仁」・「惻隠の情」～＞

●他方、「徳」といえば儒教の論語を思い浮かべられる方も多いのではないでしょうか。論語に掲げられる徳目（仁・義・礼・智・信）の中で孔子が最も大切にしていたものが「仁」（真心からの思いやり）でした。その後孔子の教えを受け継ぎ性善説を唱えた孟子は、「人間には誰でも同情心や惻隠の情（哀れみの心）があるものだ。」と言い、その例え話として次のような話を残しています。

「今、仮に赤ん坊が井戸に落ちかけていたとしたら、誰でもハッと条件反射的に助けようとする心が起きるだろう。それは、その幼児の父母と仲良くしたいとか、村落の人にほめられたいとか、助けなかったことで世間から悪く言われるのはいやだから、などといったよこしまな理由で起こった心では決してないはずである。」

いかがですか。非常に分かりやすい例えではないでしょうか。こうした心を人間は（本人が自覚できるか否かは別として）

生まれながらにして持っているというのが孟子の説です。



これは以前にお便りで取り上げた中江藤樹の「良知」（誰もが生まれながらに持っている素直な心・良心）にも相通じる考え方です。

＜結局、徳育の適齢期はいつなのか？＞

●以上、徳育に最も適切な時期はいつなのかについての根拠となりそうな見解三点を紹介しましたが、５歳まで、３歳まで、生まれながらと、それぞれの見解は果たして別の事を言っているのでしょうか？私はそうではないと思います。

●まず、孟子が言うように、どんな人間にも生まれつき井戸に落ちかけている赤ん坊を条件反射で助けようとする気持ちがDNAの中に組み込まれているのだと思います。しかしだからといって何も手を加えなければ、そのDNAのスイッチが常に幅広い人間関係においてONになるとは限りません。だからこそ徳育を行う必要があり、その適齢期としては、三

つ子の魂、脳科学的に言えば、シナプスの数が活発に増加する1～3 歳児頃に行うことが有効であり、こういった取組みを経て、道徳性・規範意識の芽生えがようやく水面下から外形的に見え始めるのが５歳後半である。このように整理できるのではないでしょうか。

●とはいえ、乳幼児期の子どもは抽象的な概念を理解できる発達段階に至っていないことが多く、「おもいやりを持とう」と声をかけてみたところで子どもの心には響きません。そこで、保育園では子ども集団での体験に加え、偉人の伝記物語や神話など、具体的なエピソードやビジュアルに訴えかけるものに落とし込んでアプローチする必要があります。道徳心を育むような良い絵本をたくさん読み聞かせすることの意義はここにあります。絵本の読み聞かせは、単なる語彙や知識を伝えるだけでなく親と子、保育者と子の間での会話の役割を果たします。そこで得られたイメージは鮮明に子どもの記憶に残り、その人の生き方や処世訓として役立つものです。

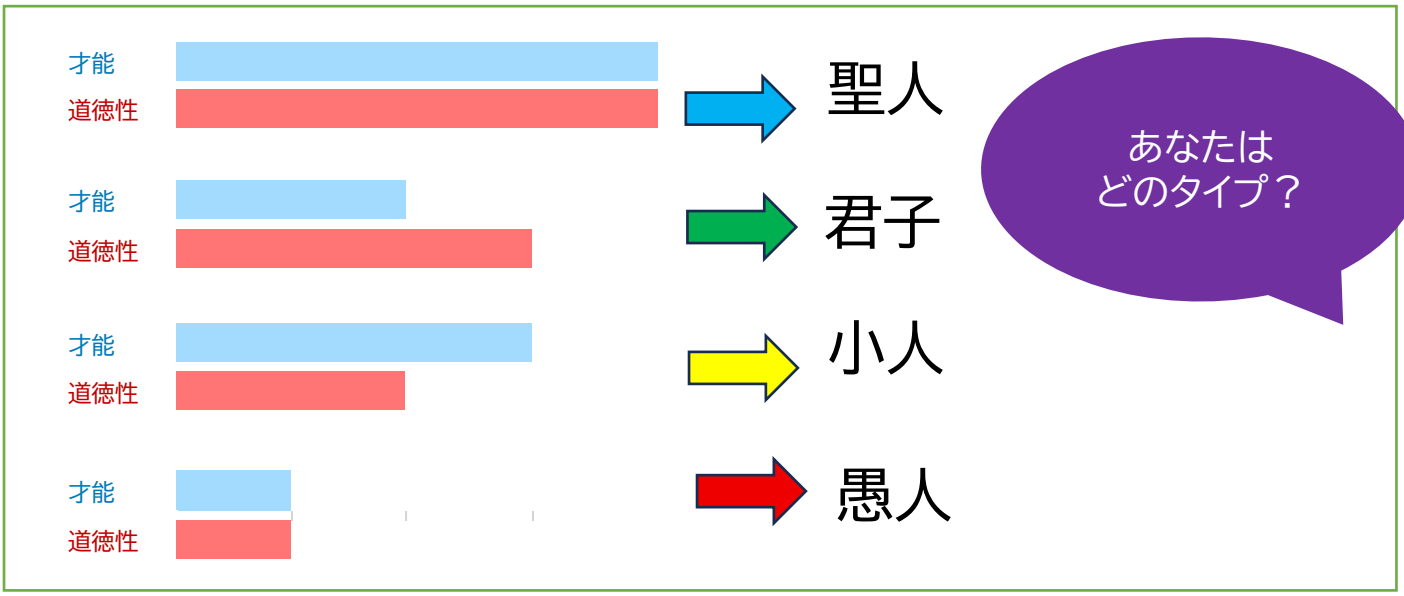
＜才能と道徳性の優先順位について～資治通鑑より～＞

●ところで、北宋の時代の儒学者である司馬光（1019年～1086 年）が著した「資治通鑑」という歴史書の中で、道徳性が人間にとっていかに重要であるかについて、才能のそれと比較しながら説明している記述が大変興味深いので最後にご紹介します。おそらく前回引用した稲盛和夫氏の方程式の元になった考え方だと推測します。

〇智伯（注：晋の武将）が滅びた原因は、彼の才能が徳行より勝っていたからであります。才能と徳行は異なるものです

が、普通の人間には区別できないので、賢明と称賛します。それが見誤る原因となります。
〇聡明明察、意志堅固を才能と言い、公正公平、不偏不党、中庸温和を徳行と言います。
〇才能は徳行がなければ発揮できず、徳行は才能を制御します。(中略)
〇才能徳行兼備のものを『聖人』と言い、ともにないものを『愚人』と言います。才能が徳行に勝っているものを『小人』と言い、徳行が才能に勝っているものを『君子』と言います。
(引用:司馬 光. 徳田本電子版 全訳資治通鑑 1 戦国時代 (p.107)」

ここで面白いのは、才能と徳行(道徳性)の配分比率によって人物を4分類している点です。

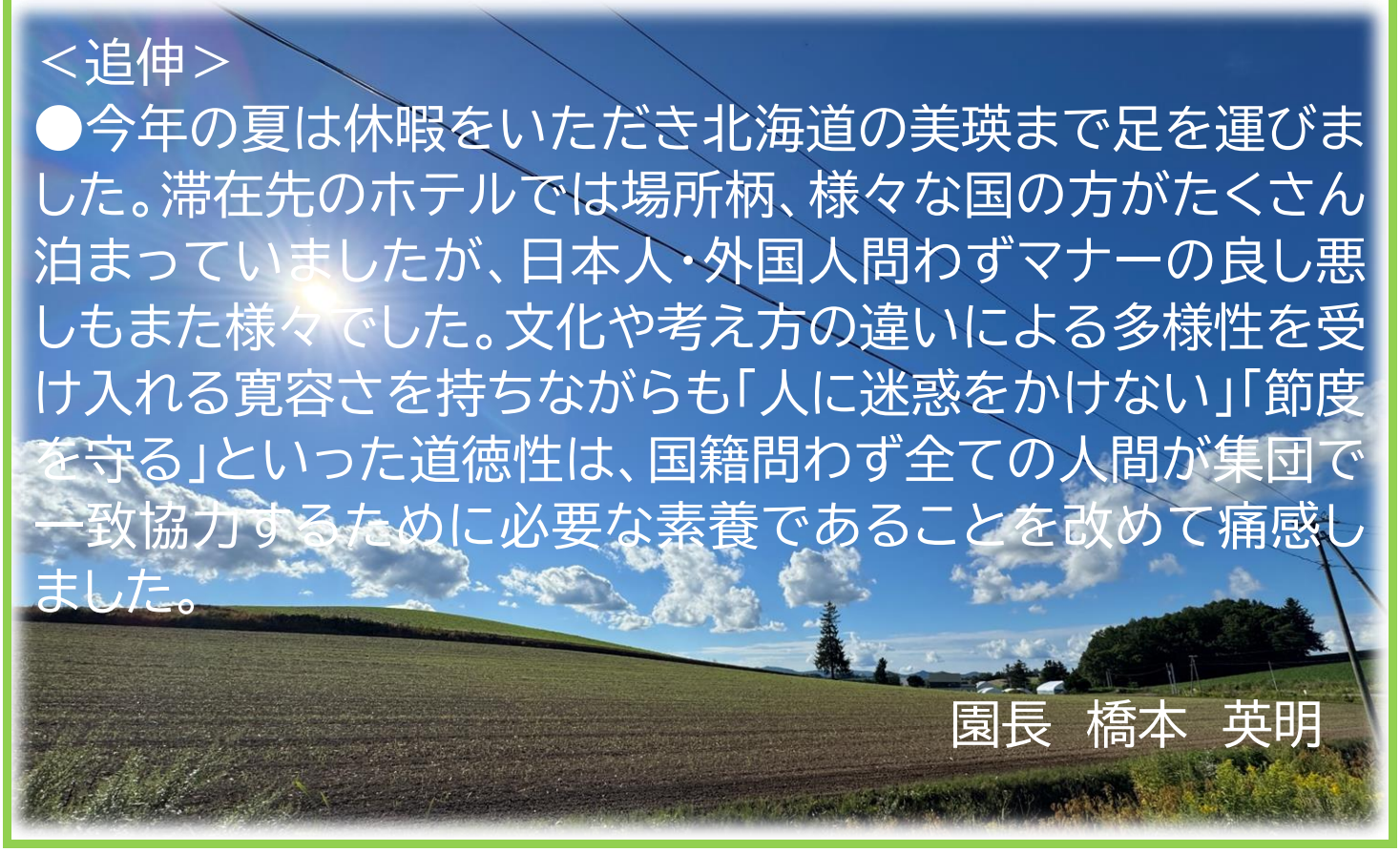


そして、話は人事の要諦について続きます。
〇人材を選抜する方法は、もし『聖人』や『君子』を得ることができないなら、『小人』を採るより、『愚人』をとるほうがましです。なぜでしょうか?『君子』は才能を善行に使いますが、『小人』は悪事に使うからです。才能を善行に使えば世の中に有益ですが、悪事に使えば被害は無窮(注:限りないこと)です。『愚人』は悪事をしようとしても知恵がまわりませんし、能力も足りません。

〇徳行は人の尊敬をうけ、才能は人に愛されます。尊敬される人は疎んじられがちですが、愛される人は容易に親しくなります。ですから監査、観察する人は才能ある人にうまくしてやられ、徳行ある人を忘れさるのです。

●私は最初にこれを読んだ時、(…愚人っていう言葉の使い方どうなのよ)と時代の違いを感じましたが、それは小人に陥ることの危険性、ひいては徳育を怠ることへの警鐘ゆえの誇張表現だと理解しました。

●確かに、私自身を内省してみても、人格者に対しては尊敬の念があるだけになんとなく後ろめたさに似たものがあるのか、気楽に関われない所がありますが、才能に溢れた人に対しては、話も面白く、かつその才能に魅了されチヤホヤしがちです。しかしその人に道徳性が伴わない時の悲劇は、才能との乖離が大きければ大きいほど際立つというのは、徳育を考える時だけでなく、私たちが現代社会を生きていく上で肝に銘じておくべきことだと感じました。



＜追伸＞

●今年の夏は休暇をいただき北海道の美瑛まで足を運びました。滞在先のホテルでは場所柄、様々な国の方がたくさん泊まっていましたが、日本人・外国人問わずマナーの良し悪しもまた様々でした。文化や考え方の違いによる多様性を受け入れる寛容さを持ちながらも「人に迷惑をかけない」「節度を守る」といった道徳性は、国籍問わず全ての人間が集団で一致協力するために必要な素養であることを改めて痛感しました。

園長　橋本　英明